其時は何の感興も湧かなかつた。此頃になつて別段何の期待もせずに偶然開いて讀んで見た所、驚くべし、彼の良心は詩の裡に自己が映つてゐる事を發見したのである。ヲーヅワスの詩はミルの良心と呼應する客觀的對象であつた。新たに到達した所の良心に對して此客觀的足場を得たるミルの歡喜は譬ふるに物がない。彼は詩の眞理に關して左の言をなしてゐる。

The imaginative emotion which an idea, when vividly conceived, excites in us, is not an illusion but a fact, as real as any of the other qualities of objects; and far from implying anything erroneous and delusive in our mental apprehension of the object, is quite consistent with the most accurate knowledge and most perfect practical recognition of all its physical and intellectual laws and relations.

Autobiography P. 87.

等しく感覺的經驗に出發し乍ら、其末に於ける詩の見解に就てミルがヒュームと全く正反對の結論に到達した事はかくの如くである。ミルは又終り迄功利說の名目を維持したが、其實質に於ては彼が受繼いた功利說を遙かに後方へ駈け拔けて、新境涯を開拓したのである。快樂及苦痛は最早彼の問題ではない。彼が深く確信した眞理は人格の生長である。苦痛は必ずしも惡ではない、否寧ろ善である場合が多い、苦痛中 growing pain は決して輕からざる苦痛である。

It is better to be a human being dissatisfied than a pig satisfied; better to be Socrates dissatisfied than a fool satisfied.

彼は實に經驗の見地より達し得る最後の階梯に進んだのであつて、彼の先一歩は斷崖絕壁をなすのである。彼は一歩たりとも後へ引く事を潔しとしない。經驗界の岸邊に立つて、對岸の靈界より遙かに風

に送られる所の靈氣に常住しつゝ良心を研磨し、從容として僅かに身を置くに足る位の狹隘なる足だまりを守つて居つた所のミルの態度は、殆ど Stoicism の皇帝マーカス、オーリーリアスの風貌を偲ばしめるのである。復活の宗教を信じて來世の希望を有するに至らず、嚴肅なる「運命」の前に立つて、從容其枉ぐべからざる必然を受容する――これ實に悲壯なる光景であると同時に道德上の一偉觀である。彼の文章に一種犯すべからざる氣品が備はるのは決して偶然ではない。

科學の勢力が益膨脹して宗教は僅かに其餘燼を保つてゐるといふ現代思潮の傾向は果して常調と目すべきであるか。啓示宗教が厄介視せられてゐる事現代の如きは未だ曾て見ざる現象である。全然宗教を否定するのは未だよい。詩の如く音樂の如く形なくして影のみの宗教を唱へて眞の宗教は此處にありとし、啓示の宗教を以て時代後れの廢物に過ぎずとするのである。現代に於ては無宗教であるけれ共無宗教の名に對しては恐ろしく神經過敏であつて、詩的宗教の名目を楯に啓示を失つたる良心の暗黑を隱さんと努めてゐるのである。此矛盾と不誠意は果して何時迄繼續するであらうか。

今の時代に於て啓示の宗教が成立し得るや否やを討究するは徒らに益事態を紛糾せしむるに過ない。之は論理の問題といふよりも寧ろ良心の問題である。基督教的良心が生れ出でない者に向つて啓示の眞理を說くのは、恰も豚に眞珠を投げ與ふる樣なものである。確信とは誠にニューマンが言へる如くに反射作用によつて發生するものである。內なる良心に對する客觀的對象が啓示であつて、二千年前に基督によつて顯はされ、爾來神の生ける機關として地上に實現し來れる有形無形の啓示が、心內に於る基督教的良心と相照應し、其反射作用

の間に宗教の確信が生長して來るのである。於是乎、面布を除きたる眞正の神の御姿を拜するを得るであらう。

I should observe that the Supreme Being is both—a living, individual Agent, as sovereign as if an Eternal Law were not; and a Rule of right and wrong, and an Order fixed and irreversible, as if He had no will or supremacy, or characteristics of personality.

J. H. Newman: University Sketches, Chap. VI.

人が一旦此確信に到達するや宗教の眞理は手足を有つてゐる事よりも猶確かな事實となつて來るのである。彼の身體は最早我身體にして我身體にあらず、萬能の御手は彼の上に載せられて、凡ての自由は彼より取去られて終つた。彼は上よりの壓迫に殆ど堪え難い思ひであるが、よく其裡に常住し得る所以のものは神我と共にありといふ確信があるからである。

此境地に達せんが爲に如何なる準備を要するか？我々各自の生涯には其衷心果して眞の音色を發するか或は全くの胡麻化しであるかを見分けする所の多くの辛い試練が供せられてゐる。批評家セヲドル、ヲッツ、ダントンは詩の國を闢くの鍵はSincerity and conscienceであると稱へた。單に靈界の瞥見に過ない詩の眞理でさへ猶此用意を必要とするとせば、況してや人生至要の問題である所の宗教的眞理に於てをや。富める青年基督に來りて、我かぎりなき生を得んが爲に何をなすべきかと問ひしに、主之に答へて往て爾が所有を售て貧者に施せ、然れば天に於て財あらん而して來り我に從へと宣はれた(馬太傳一九章)。神の求め給ふものは渾身の赤誠である。眞に自己の靈魂の哀れむべきを自覺し、全心全力を捧げて神を仰ぐの良心が湧き出でなければ靈

界の門は開かれないのである。極く少量の麹酵(はんだね)も其全團を膨脹せしむるに足る(加拉太書五、九)。明鏡の如く澄(す)める池は鮮やかに天地の影を宿すのである。されど只一塊の石片を之に投せよ、其全豹は立所ろに毀たれるに至る。最後の只一歩は殆ど全局を左右する程の重大なる歩みである。

「主よわが弱き足をまもりて、行く手の一歩みを示し給はゞ足りなん」。

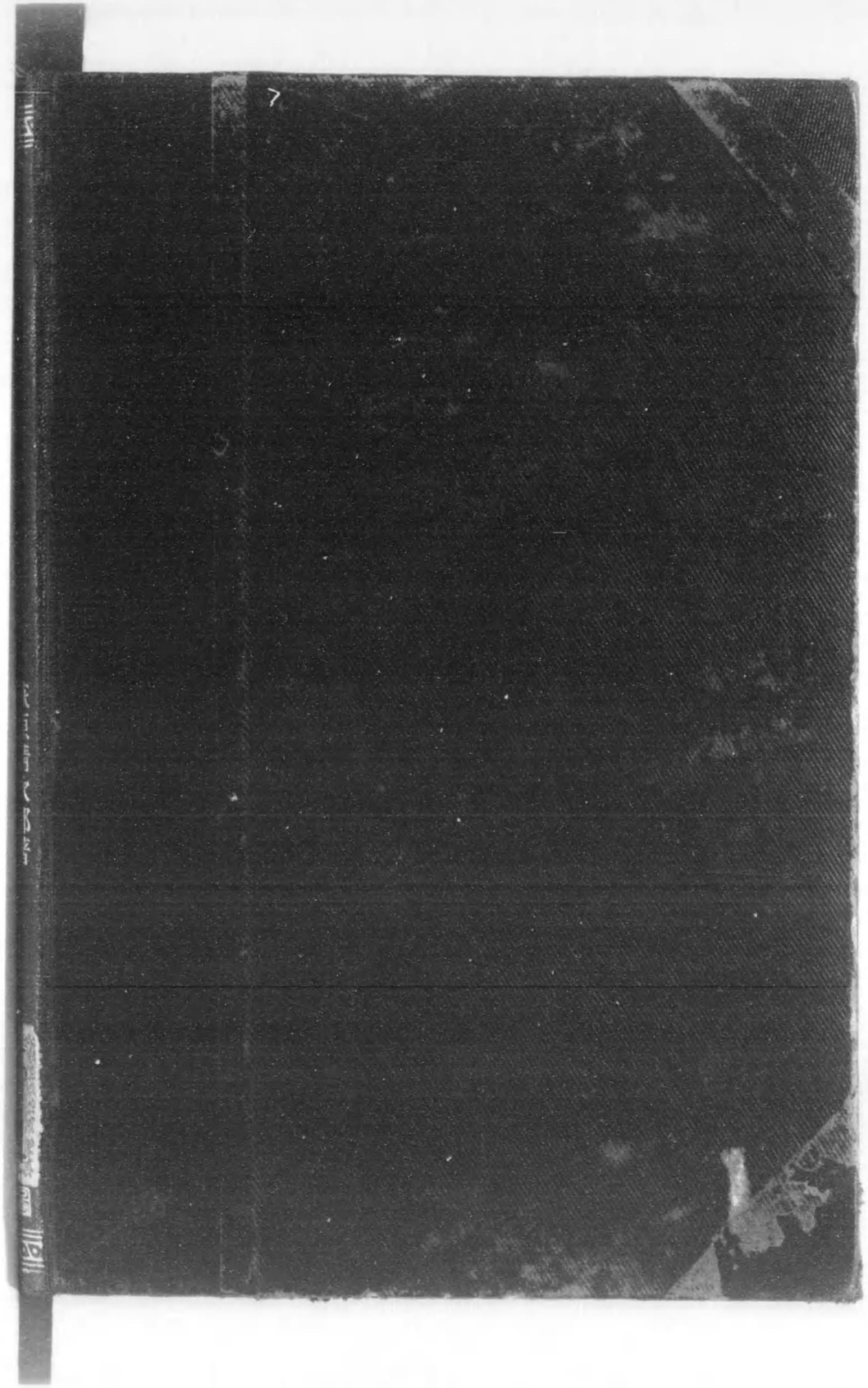
基督教と近世思潮　終

不許復製

大正六年六月二日印刷
大正六年六月五日發行

〔定價金六拾五錢〕

著者兼發行者　萩原清次郎
印刷者　東京市京橋區銀座四丁目一番地　山口米吉
印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　教文館印刷部
發賣所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　教文館

325
504

終